シリーズ 城

特許審査第3部プラスチック工学　深草 祐一

第五回　高知城
～山内一豊の出世物語と幕末の風雲～

今年のNHK大河ドラマは、土佐藩初代藩主山内一豊とその妻の千代を主人公とする「功名が辻」でした。一方、土佐藩といえば幕末を思い浮かべる方も多いでしょう。今回は、それらの舞台となった高知城を取り上げます。

高知城の築城

この地はもともと大高坂山といい、南北朝時代の城跡に四国の覇者となった長宗我部元親が一旦城を築きましたが、河川の氾濫が激しく、放棄された場所でした。関ヶ原後、土佐に入った山内一豊は、大規模な河川工事を行って大高坂山に城を築きます。そしてこの地を河中山としました。後に高智山と改められ、それが略されて高知城と呼ばれるようになったということです。全城郭完成までには十年を要しましたが、享保年間に起こった大火でほとんどが焼失してしまいます。城はその後24年かけて往時のままに再建され、現在残っている天守等はその時再建されたものです。

初代藩主・山内一豊

山内一豊は、主君の信長や秀吉の物語でも滅多に登場することのないマイナーな武将ですが、関ヶ原の戦いにおけるエピソードによって歴史に名を残しています。上杉討伐の途上、石田三成らの挙兵の報を受けて開かれたいわゆる小山評定において、真っ先に家康支持を表明するとともに、掛川城を兵糧ごとそっくり家康に明け渡す旨を申し出て、家康支持の流れを決定づけたのでした。その功績により、関ヶ原では後方に配置されて武功は無かったにも関わらず、掛川6万石から一挙に土佐一国24万石の大大名となったのです。

さて、この山内一豊という人は、人柄は良かったようですが、あまり武勇に優れた武将ではなかったらしく、記録に残る目立った武功と言えば、越前朝倉氏の追撃戦において、頬に矢を受けながら三段崎勘右衛門という剛の者を討ち取ったことくらいです。そこを人数によって補おうとしたようで、自分の俸禄以上の家臣を召し抱え、千代が升の裏をまな板代わりに使っていたという窮乏生活の逸話が残っているほどです。それでも、秀吉の勢力拡大に従って地道に出世し、秀吉が織田家の跡目争いに勝利した頃には、近江長浜2万石の城持ち大名となりました。長浜城は秀吉の居城だった城ですから、一豊への信頼が伺えます。一豊は目立った武功こそないものの、いつも秀吉の側に居てよろずの雑事を誠実に処理する他にないタイプの人材だったのではないかと見る人もいます。そして秀吉の天下統一後は、遠江掛川5万石へと加増されました。これも同僚と比べて石高は低かったものの、東海道の要衝大井川を所轄する掛川は、江戸に移封となった徳川家康への備えとして重要な位置にありました。一豊は掛川城の大規模な改修を行い、天守や大手門を建設し、城下町を整備しました。掛川城は石高の大きい近隣の城を差し置いて東海の名城と呼ばれたといいます。この掛川城天守の形を写して造られたのが後の高知城の天守で、現在、逆に高知城の天守を参考にして掛川城の天守が木造で復元されています。また、駿府の中村一氏と協力して歴史に残る大井川の治水事業も行って

おり、優れた民政手腕を見せています。

このように、一豊は戦働きというよりは庶務や民政能力を買われた人物であったようです。関ヶ原後に与えられた土佐は、西軍に組して改易された長宗我部氏の遺臣が多く残る統治の難しい土地でした。これは家康から民政能力を期待されてのことと考えられます。そして、一豊は見事その期待に応えて土佐を治め、幕末まで続く土佐藩の基礎を築いたのでした。しかしながら、その際にとった上士（掛川以前からの家臣）と郷士（長宗我部の遺臣）との身分制度が、幕末に郷士から多くの志士を生むこととなり、倒幕運動の中心になっていったことは、歴史の皮肉といえるでしょう。

一豊の妻・千代

一豊が特に戦に強い武将でもなく、優れた智謀の人でもなかっただけに、出世の裏には妻の内助の功があったという話が強調されることになりました。有名なエピソードの一つが、千代が秘蔵していた黄金10両で名馬を買い、馬揃えで信長の目にとまった話。もう一つが、関ヶ原直前に大坂の状況と自分の覚悟の程をしたためた密書を一豊へ届けさせ、一豊は千代の指示通りに行動して家康の信頼を得たという話です。特に後者のエピソードが千代の賢夫人としての評価を決定付けており、土佐24万石は千代のおかげであるとの評判を生むことになりました。このタイミングで絶妙な演出をやってのける千代はやはり只者ではなかったと思いますが、しかし、お家の一大事という場面で一見出過ぎとも思える妻の行動を即座に受け入れて行動することができた点にも注目すべきです。目立たないけれども着実に出世を続け、最後に家康から取り立てられたのも、妻の言うことを素直に聞き入れられるそんな一豊の人柄あってのことだったのかも知れません。

第15代藩主・山内豊信（容堂）

時代は飛んで、第15代の山内容堂は幕末四賢候と呼ばれる藩主の一人です。佐幕、公武合体論者で、尊王攘夷を掲げる土佐勤皇党を弾圧し、武市瑞山（半平太）を切腹させる等、志士の立場からは敵役として見られがちな殿様ですが、坂本竜馬が考えたという大政奉還の策を後藤象二郎から献案され、徳川慶喜に進言した人物として知られています。そして、王政復古の大号令の後に開かれた小御所会議において、倒幕に傾く議論の中で一人徳川家擁護の姿勢を通したことはあまりに有名です。容堂のこのような佐幕の姿勢は、はるか昔の関ヶ原の戦後処理において土佐24万石に大抜擢された山内家ならではと言えるでしょう。ほとんど全滅に近い状態となりながらも薩摩に逃げ帰りその後の交渉で辛うじて所領安堵を得た島津家、内応して動かなかったにも関わらず120万石から37万石へ大減封されて長州萩へ押し込められた毛利家とは、三者三様の態度の違いがあります。

ところで、容堂は自らを「鯨海酔侯」と呼ぶほど酒をこよなく愛する豪放な趣味人でもありました。晩年は東京浅草に住み、市川団十郎一座を借り切ってしまうなど多くの豪快なエピソードを残しています。土佐の清酒「酔鯨」の名はこの雅号が由来だということで、なるほどラベルには山内家の三葉柏の紋が印刷されています。

ぜひ訪ねたい高知城

全国には木造の天守閣が現存している城が12箇所あり、高知城もそのひとつですが、高知城のすばらしいところは、天守だけでなく、本丸御殿、多数の櫓群そして大手門という建築物もセットで現存している点です。また、規模も手頃なので、戦国の技術を集大成した守り易く攻め難い実戦的縄張りが体感として理解しやすい城でもあります。高知を訪ねた際には、桂浜の坂本竜馬像を見に行くだけでなく、是非高知城にも御登城ください。